

はじめに

平成二十一年（二〇〇九）八月、新潟県十日町市の「鉢の石仏」にほど近い一軒の民家に「石仏 語らいの家」と書かれた看板が掲げられました。この「家」の誕生には、石仏と鉢の集落を取り巻く幾つかの縁と、その縁に結ばれた人々によって紡がれた「人の輪」が深く関わっています。そして、その輪の中心にいる人物が、この家の主である尾身ミノさんです。ちなみに、ミノさんは、「語らいの家」の二階にある「明治 大正 昭和の館」の館長でもあります。

新潟で代々続いた大工の棟梁の家に生まれたミノさんは、昭和二十五年（一九五〇）、鉢の尾身國政さんに嫁いできました。義父・尾身佐太郎さんは木挽職人で、國政さんも復員後、家業を継ぎました。農業の傍ら、木挽職人としての家業をこなす家の嫁として、鉢での人生のスタートを切ったミノさんでしたが、昭和二十六年に佐太郎さん、昭和三十七年に國政さんが事故で亡くなる不幸に見舞われます。真田小学校で給食の仕事を続ける一方、鉢の皆さんとの絆のなかで、元氣を取り戻したミノさんは、生来の好奇心と向学心を活かし、鉢の女性たちの暮しや民俗に目を向け、亡き義父と夫の木挽道具を十日町市博物館に寄贈し、同館の友の会の活動にも大きな役割を果たしました。一方で、自宅に残る木挽道具や、かつて太子講に使った食器、生活用具、子どもたちの遊び道具などをコツコツと整理し、自宅の二階を改築して、密かに「資料館」作りに取り組んでいました。しかし、中越地震の傷跡も癒えない平成十八年の四月に脳出血で倒れ、今は新潟でリハビリに励んでいます。このミノさんを、ずっと身近で支えてきたのが鉢の集落の方々です。農村集落の連帯のなかで、地震の時も、倒れた時も、一人暮らしのミノさんを助けたのは、毎日の「茶飲み」を楽しむ、上は90過ぎから70歳代の仲の良い近所のお友達でした。また、ミノさんには強力な助っ人集団としての「いとこ会」の存在があります。兄弟姉妹から繋がる会は、子どもたちから孫を含めたネットワークへと広がり、ミノさんの資料館計画も含め、お互いに支え合い、今も活発に活動中です。

ミノさんを取り巻くもう一つのご縁が、立教大学の調査実習です。同大学の博物館学芸員養成課程が、昭和五十一年度から五十二年度にかけて実施した調査実習の舞台が鉢でした。中川成夫教授の下で、五十一年の夏は「鉢の石仏」、翌年の春は集落の民俗を中心とする調査でした。この調査に参加した学生たちは、調査の期間中、鉢の民家に分宿させていただいたのですが、その一軒がミノさんのお宅で、私もその時にお世話になった学生の一人でした。それ以降、鉢を第二の故郷として慕い、永く関係を持ち続けている学生たちも数多くいます。

そして、第四回目を迎える「大地の芸術祭」が催される本年、ここにご紹介してきた「ご縁」で結ばれた人たちの間に、鉢を訪れる人々に、何とかミノさんの資料館をお見せしたいという機運が盛り上がり、実現したのが「石仏 語らいの家」です。夢は広がり、資料の展示だけでなく、この家に集う方々と、ワークショップやトークを楽しむイベントも企画しました。それぞれが仕事を持つ身の、単に「鉢が好き」という身勝手な企画で、計画性も無い準備のなかで、せめて立ち寄っていた方へ、お渡ししたい気持ちとして用意させていただいたのがこの小冊子です。

ここに収録したのは、『十日町市博物館友の会 妻有地方の暮しと歩みⅡ 郷土記録賞入賞作品集／1990年～1995年』（平成十六年九月二十八日刊行）所収の二編の文章です。一編はミノさんが執筆した「木挽職人のこと」、もう一編は、ミノさんのお姉様である齊木ハルさんがまとめた「母の遺産 鉢の唄」です。「語らいの家」を象徴する資料として選ばせていただきました。人々が集う「場」としては、まだまだ未成熟なこの一ヶ月の活動を、私たちは細々ではありますが、何とかこれからも発展させていきたいと思っています。

最後に、「石仏 語らいの家」の実現に際し、心からのご協力とご支援をいただきました、鉢の尾身浩区長をはじめとする皆様、十日町市博物館の竹内俊道館長、同館友の会、大地の芸術祭実行委員会、「いとこ会」および門脇洋子さんを中心とする実行委員の皆様、そして何より、大切な思い出の詰まったご自宅を快く提供してくださった尾身ミノさんに、心より御礼申し上げます。

平成二十二年 八月

「石仏 語らいの家」実行委員を代表して

半 田 昌 之（たばこと塩の博物館 学芸部長）